

第17回

人権研究交流集会「差別が生まれる構造―ハンセン病問題から考える」(3/20・21 福岡)

第二七回人権研究交流集会にお越しください

―二日目全体会の紹介

第二七回人権研究交流集会実行委員会準備会

現地事務局長 田上 普一

一 はじめに

二〇二二年三月二〇日、二一日にアクロス福岡で第二七回人権研究交流集会が開催されます。

既に大会のご案内を差し上げていますが、今回は、二日目二日日曜日に開催されるひまわり一

二 憲法劇について

座による憲法劇と全体会シンポジウムについてご案内します。

二日目の大会は、午前九時三〇分から憲法劇で幕が切られます。会場は、七〇〇名ほど収容でき

るアクロス福岡地下二階のイベントホールです。

今回、憲法劇を演じていただくのは「ひまわり一座」の皆さんです。

ひまわり一座は、平和憲法の大切さをわかりやすく伝えるために一九八九年に創立された演劇集団です。劇団員は、弁護士、法律事務所事務職員、会社員、学生など様々な方々から構成されています。

今回の演目は、「茶色い朝」で、フランスのベス

トセラー作家であるフ

ランク・パウロフによる同名小説を、福岡の

山崎あづさ会員が脚本化したオリジナル作品

で、ナチ党の「茶色」に社会が染まっていく過程を描いた作品です。



ひまわり一座による憲法劇「茶色い朝」

実行委員長のご挨拶

福岡 原田直子

二〇二〇年三月は、年末年始のGOTO中止と緊急事態宣言に伴う国民の自粛、欧米で開発されたワクチン接種開始が功を奏して、コロナ禍は収束の兆しが見えてくるでしょう(と願っています)。

青年法律家協会の人権研究交流集会は、差別を無くし人権擁護活動を推進するための必要緊急の集会ですから、布製マスク(ウレタンマスクやマウスシールドは飛沫抑止効果が半減するそうです)を着用し、新幹線や飛行機の席は親しい方たちといえども離れた席を予約しつ

つ、福岡に集まって、心は熱く、口調は静かに議論しましょう。

憲法劇「茶色い朝」も必見です。

本来ならば、ここで福岡の観光案内をするところですが、二〇日の夜は中洲を闊歩しないで、久しぶりの同期との旧交は、ホテルのラウンジで静かに杯を傾け、ワーク・ライフバランスに配慮して集会が終わったらすぐ帰ることにしましょう。

それでも、人権のためにはどこにでも飛んでいく青年法律家協会の素敵な会員の皆様たちとお会いできるのを福岡の会員一同楽しみにしています。

来れ(?!?)福岡へ

勿論、オンラインのご参加も大歓迎です。

今回は、福岡の劇団「FORTEEN PLUS S14+」で活躍されている演出家の中嶋さんとをお迎えします。

この憲法劇「茶色い朝」については、諸般の事情により、WEB配信を行いませんので、是非とも、会場にご来場いただきご覧ください。

三 シンポジウム

「差別が生まれる構造―ハンセン病問題から考える」について

午前一〇時から全体会シンポジウム「差別が生まれる構造―ハンセン病問題から考える」を開催します。

残念ながら、私たちの社会には「差別」という問題が横たわっています。

差別の解消に取り組むことは、青法協会員、弁護士である以前に「市民」として、私たち一人一人に課せられた使命だと言えますが、差別の問題は、私たちの社会に染みついており、差別の再生産が繰り返され、その解消は容易ではありません。

今回、私たちは、この「差別が生まれる構造」に着目し、ハンセン病問題を題材にして、差別を解消するためには、どのような課題があるかを考えていこうと思います。

今回、シンポジウムの題材に挙げたハンセン病の差別の問題は、国家政策によって差別が正当

化・主導され、それを市民が受入れて、ハンセン病の元患者の方や家族の方を苦しめてきました。皆さんご存じのとおり、ハンセン病差別については、熊本地方裁判所の判決によって断罪され、国もその政策の誤りを認めて差別解消に向けた政策が行われています。

しかし、ひとたび私たち社会の共通認識として定着してしまった差別構造は、こうした司法判断や行政政策にもかかわらず、今なお、解消されるにはほど遠い状態です。ハンセン病差別の問題が、これほどまでに社会の共通認識として定着し、そのことが誤りであることが明白であるにもかかわらず、なぜ、ハンセン病差別が紡ぎ出され再生産され続けるのか、考えていきます。

今回、パネリストにお招きするのは、ご家族がハンセン病の元患者でご自身も差別体験を受けてこられたハンセン病家族訴訟原告団副団長の黄光男さん、ハンセン病問題に長年携われてきたハンセン病家族訴訟弁護団共同代表の徳田靖之弁護士、ハンセン病差別を題材とした小説「あん」の原作者であるドリアン助川さん、教育現場からハンセン病差別解消に長年にわたり取り組まれてきた広島県福山市の^{えいしん}盈進中学高等学校校長の延和聰さん、延和聰さんの教え子にあたり現在もハンセン病元患者の皆さんと交流を続けている大学生の後藤泉稀さんの五名の方です。コーディネート

は、医療、社会福祉、教育問題等に詳しい元NHKアナウンサー・元解説委員であるジャーナリストの迫田朋子さんにお話ししています。

全体会は、二部構成で、第一部は、基調講演として、ハンセン病差別の問題を黄光男さんと徳田靖之弁護士からお話しいただきます。

第二部は、シンポジウムで、五名のパネリストの皆さんで、「差別が生まれる構造」と差別の解消についての道筋についてお話しいただきます。

また、ドリアン助川さんによる小説「あん」のモデルになった上野正子さんにも、WEB出演ない

しはビデオメッセージによるご出演を調整しているところです。

新型コロナウイルスが猛威を振るう中でも、残念ながら差別の問題が大きくクローズアップされています。社会の構成員である市民の一人一人が、差別のない社会を実現するためには、どのような課題があり、どのように取り組んでゆけば良いのか、差別を受けてこられた被害者の立場、解消に取り組む弁護士の立場、次世代の市民を教育していく教育の立場など様々な観点から考えていきます。ふるってご参加ください。